

# 琴

## 藤生純一

楚の伯牙は琴を愛した。その指にかかれれば森羅万象ごとごとく表現し得ざるものはなく、その旋律は聞く者の心を震わせ、その音色は思わず知らず涙を誘った。「当世随一の琴の名手」という評判は正しく彼のものであったが、彼はそうした巷の声などどこ吹く風、ひたすら孤高を持するかのごとく、一人琴の技に磨きをかけるのみであった。

彼は弟子もとらなかつた。どんなに優れた才能でも、そしてどんなに豪華な品々を積まれても、彼は涼やかな無表情で首を横に振る。実際、一芸に秀でたものは、多くの弟子を抱えることによつて、さらなる富と名声とを勝ち得たが、しかし彼はそんな世事にも一切無頓着な様子で、ただ恬淡と琴を爪弾くだけであった。

芸術家は誰でもあえてなければならぬ。だから心ある人々は裏のない敬意を込めて彼をそう評した。富のためでないのは勿論、名声のためでもなく、ただただ芸術のための芸術を為し得る者こそ、世にも崇高な芸術を創り出すことができるのだ。それこそが芸術家の唯一正しい態度というものだ。真正正銘、真の芸術家とは正しく彼のことだ。

しかしそうした彼の態度がますます巷の評判を高めることになるという人世の皮肉を、まず初めに彼自身が最もよく知っていた。そんなことはおくびにも出さなかつたが、誰に対しても超然とした無表情のその裏で、彼は国中に鳴り響く高名が内心満足でないこともないのだった。自分の腕に驕り高ぶる青臭さは毛頭ないが、琴によつて歴史に名を残したといは物心ついてよりの彼の宿願であつた。だからそうした巷の評判が、多年に渡る血を吐くような精進への正当な報いだとの思いは確かにあつた。

眠りに就く前のひと時、彼はよく、決して短くはなかつた三十数年間の半生を振り返つた。そこには自らの肉を引きちぎるよつに、あらゆる欲望を断ち切ってきた痛苦な道りのみがあつた。酒を断ち、美食を断ち、女も恋愛も、一家を成すことも、そしてささやか

な無為の安らぎさえも断つて、ただ琴に明け、琴に暮れた。薄弱な風聞だけを頼りに、新たな演奏技術を伝授してもらうために、世俗から隠遁しているという優れた演奏家を求め、遠い異郷の地を飲まず食わずで彷徨ったこともあった。盗賊に襲われ、危つく一命を拾ったのもそのときの体験である。また自らの琴をさらに改良するために、寝食を忘れて知恵を絞り、失敗の絶望から何度も再起して、様々な工夫を試み続けた日々もあった。そしてそれは今も変わりがない。世俗の愉楽や慰みを捨て去るばかりでなく、命さえも賭けて、なぜそれほどまでに彼は琴に執着したか。いつも生氣に満ちた若々しい無表情の裏側に、当為に自適する平安な心境などはいつまでたっても獲得できず、自らの半生を振り返る彼の胸に去来するものは、心の水平線の彼方から次第に高く寄せくるような孤独の黒い波影であつた。ただ一つの道に徹してきた者だけが知る、心を切り裂かれるように鋭利な孤独。時には身悶え、大声で吠え狂いたくなるような分厚い孤独。そんなとき、断ち切ってきたささやかな欲望への激しい未練が、揺れ動く闇に似た奇怪な魔物のように心の奥底から茫洋と攻め寄せてくる。それは時には家族や恋人や友人やのたくさんの人々との温かい心の交流であり、時には酔い痴れる美酒と美食の香りであり、また時にはほの赤く上気する女のふくよかな裸身でもあり、それらの渾然一体となつた、どうにもならぬ、自身の胸底に隠然と棲まう妖魔であつた。心の自然であるが故にますます膨れ上がり、決してそこから逃れることのできぬ執拗な妖魔。彼はそれに心底魅かれるが故に、心底それを恐れる。跳梁する妖魔に支配された狂わんばかりの一人の夜が、彼のか細い精神をねじ伏せようと周囲から眈々と覆い迫ってくる。そして彼の心はその邪悪な眼光に押し潰されそうになる。

だが、彼は琴にのみ徹する完璧な人間でありたかつた。琴以外のあらゆる物事に無欲な、低劣な精神を少しも感じさせない高潔な君子。かつて彼が全身全霊を持って敬愛した琴の師のような。彼はそこに美を感じていた。自尊心であつた。が、同時に彼はその裏に、師を心底慕つたがゆえに、その存在によつて呪縛され続ける自身の心をも執拗に自覚していた。あらゆる神技はただただ一つの道への徹底した修練、そして何よりそこから生ずる無心によつてのみ支えられる。自らの厳しい実践の中から体得したその教えを師は優しく説き続けた。そんな師を裏切るなど、今でも彼にとっては気の遠くなるような禁忌であつた。修練に修練を重ねる徹底した精進。そこからおのずと生まれ出する、我欲の消え去つた澄明な無心の心境！ 行動は意志によつて律することができて、隙に乗じた邪心の表出を抑えることは人間にとつてきわめてむずかしい。だから何より彼は、自分を見つめる周囲の人々の眼光を恐れた。名手となつた今ではなおさらのことだ。内心を決して覗かせ

ない仮面としての無表情を、誰をも欺く自然の表情にまで作り上げてきた努力も、あるいはそうした強迫観念の賜物と言えるかもしれない。「当世随一の琴の名手」 胸に荒れ狂う未練の嵐の中で一人自らにそう吹きかけ、彼の心は毎回ようやく冷静さを取り戻す。昔から、琴を愛する気持ちに嘘偽りはなかった。それ故琴による名声ものだから手が出るほどにほしかった。それこそが自分の第一の望みに違いないと彼は心底から思う。逆らうこと能わぬ師の大きな影を常に意識しつつも、琴への思い自体も真正銘自らの心の自然ではあった。それを確認し、彼はさらなる厳しい修練を独り自己に課し続ける。だから巷の評判こそは、そんな狂わんばかりの孤独を慰め得る唯一の代償に他ならなかった。

しかし、そんな彼にも一人の友人があった。鐘子期という。かつてともに琴を学び、少年時代、一時は彼とともに「両雄相並ぶ」とまで称された男であったが、指を傷めて琴を捨てた。それからは彼の琴のまたとない理解者として、自他ともに許す間柄であった。

二人は常に通い合った。子期の批評は的確で、たまにはぐさりと胸を突き通すこともある。もはや師を必要としなくなったときから、彼は一方では子期の批評を自らの精進の一つの依り所としていた。それも事実であった。しかし他方ではその批評に対し、どこか醒めた自分を感じていた。結局は自分の感受性を信じる以外にないという自明性においてではない。彼にはただただ退屈だったのだ。

子期は昔から彼の音色と旋律とを聞くだけで、的確にその演奏の意中を悟った。その眼力はまさに驚くべきものであると彼は正直に認めざるを得ない。そして子期は直観した彼の意中に基づいて、その演奏の過不足を的確に指摘した。他の誰にも真似のできぬその深い洞見。しかし結局は、ただそれだけのものに過ぎないのだった。今の旋律には玲瓏さが足りない、とあるとき子期が言う。言われてみれば、その通りだと思ふ。今の音色には鮮烈さが足りない、とまたあるとき子期が言う。言われてみれば、確かにその通りだと思ふ。ほとんどその繰り返しに過ぎないのだった。言われるそばからまるで着古した衣服のように、自分の精神の幅そのままに納まり切ってしまう凡庸な退屈さ。子期の批評には、自分を根底から覆すものがないと彼は密かに考えていた。

いったい俺たちの友情とはどういうものなのだろう。いや、そもそもこれを友情と呼べるものか。だから彼は時々思った。かつてはそこはかたない親しみを持ち、同じ志を持ち、互いに練磨し合った仲と言えたが、競争心などというものはほとんど持ったことがなかった。また子期が指を傷め琴を捨てたとき、さほどの同情を感じることもなかった。ともにいて特に楽しいわけではない。会わないで寂しいこともない。琴について熱して語り

合うこともすでになく、互いに沈黙したまま過ごすだけのこともある。かといって義務感で通い合っているわけでもなく、それはそれできわめて自然な関係ではあった。

琴の師の家で、初めて子期と会った日のことを彼は時々思い起こす。まだ年端も行かぬ子供だったというのに、上等な衣服を着た子期の白い頬からは匂やかな気品のようなもののさえ感じられ、彼は思わず、さながらぼろをまとったような自分の着物姿を見下ろしていた。単なる生活環境の違いではなく、もはや生まれながらにして体の内側から湧き出する清潔な香気。こういうものを身分の違いというのだと、子供心に彼は初めて知ったように思った。それは外見だけでなく、日常生活の中の些細な一挙手一投足において最初から明らかであった。

琴についても計り知れない才能を示した。それは子期がたわむれに弾く音色を初めて聞いたときからすでにして明らかであった。技量そのものが自分よりも上だと思ったわけではない。ただ、彼が自分を鞭打つような努力によってのみ為し得ることを、子期はまるで軽い遊びでも憶えるように、ちよつとした練習で難なくこなしてしまつのだ。師の視線も、彼よりもむしろ子期にこそ多く注がれているように感じた。少なくともその頃の彼にはそう見えた。彼は子期と出会って数日もたたないうちに、子期にはもはや生まれながらにして勝てない自分をおぼろげに感じていた。

彼の父は領主からの依頼も請け負ったことのある腕のいい琴職人であったが、その腕に増長したのか、いつの頃からか怠惰の味を覚え、細々と続ける農作業も滞りがちで、彼が物心ついた頃には、収入があればその多くがそのまま酒と交換されるような暮らしてであった。始終飢えに苛まれるような生活に母はすでになく、幼い頃から琴だけを遊び相手に育った彼は、父のもとに出入りし、彼の琴の音色を偶然耳にした師の請うままに、即座にそのもとに預けられた。一人になった父はそのまましばらくして死んだが、父の死は風に舞う畑の土埃ほどにも彼の心を動かさなかった。

母も知らず、父に親子の情愛など感じたこともなかったそんな彼とは違い、子期は土地の豪族の一人息子であり、風雅を好む両親に異国の高価な琴を与えられ、やがて師のもとに通い始めた。子期はその頃から正しい心の持ち主で、身分の違いなどに一切こだわらぬ鷹揚さを最初から彼に示したが、彼の方はそんな子期の心性に何かしら魅かれるところがあったわけでもない。数多い弟子の中、その年頃は彼と子期二人だけで、ただ何ということもなく口をきき始めただけのことである。その中から自然親しみも生まれたが、やはり二人を結びつけてきたのはただただ琴であった。腐れ縁と言つべきか、情性と言つべきか、

子期の方はいざ知らず、彼は子期に人間的な魅力や興味はほとんど感じたことがなかった。身分の違い故のそこはかたない興味さえすぐに修業生活の中に溶解し、子期は彼にとってその頃からずっと、退屈極まりない人間であったと言つべきかもしれない。

空気のような存在か　だから伯牙は時々思った。そんな関係がつまらないようにも、気楽なようにも感じる。しかしあるのかわからないのかわからぬ存在にしても、空気には確かに空気としての存在価値がある。彼が子期につき合うに足るだけの価値を認めていたとすれば、それはただ一つ、子期の幼児のような素直さにおいてであった。子期にはまるで心の裏というものがなかった。自意識の葛藤をほとんど持たぬ正直素直な心は、幾重にも屈折した自分の心と比較してまるで清潔であった。そのため彼は子期に対して身構える必要がなかった。子期に胸底の暗い屈折を開いて見せるなど思いも及ばなかったが、余裕をもつて子期と接することができた。それは確かに彼にとって、なくてはならぬ一つの安らぎに思えた。

ある夏の日、彼は琴を携え、子期とともに泰山に遊んだ。鐘一族の戦車に傘をつけた二頭立ての馬車に食糧と水瓶とを積み込み、二人は板で囲つて幌の屋根をかぶせた四頭立ての安車に乗り込んだ。二人の他は、それぞれの馬車を操る馭者役の僕が二人だけのさやかな旅であった。彼は穏やかな陽光の躍る外の明るい景物を馬車の窓から無心に眺め続けた。所々に群生する緑のほむらを除けば、遮るものとして何も無い、ただなだらかな起伏の続く広大無辺の黄色い大地ではあつても、初めての土地はただそれだけで新鮮で、鐘一族に所縁の豪族の城に宿しつつ泰山の麓に至るまでの十日間、眺める彼の瞳はきらきらと健康的に輝いた。いつものように子期との間に言葉はなく、馬車の心地よい揺れに身も心も委ねていた。こんなにゆったりした気分は久しぶりのことであつた。今の彼の心には、さらなる名声への渴望も、断ち切ってきた欲望への激しい未練もなかった。彼は今、ただ一人であるがままにそこにいた。もしかしたらそれは、定住する土地から遠く離れたところに来ていたという、ただそれだけの理由によるのかもしれない。子期もまた、彼のそんなゆったりした気分を理解しているのか、何も語らずに窓外に目をやっている。馬を休ませるために止めた川のほとりで、岸辺の草に腰を降ろし、腕に抱えた琴を戯れに爪弾くと、子期はまるでいとしいものでも眺めるような優しい眼差しで彼に言った。

「見よ。琴の音色に馬たちも優しくな顔を見せている」

僕が一頭ずつ川の水を飲ませた馬たちは、今は岸辺の草をのんびりと食みながら、陽光の躍るうらかな青空を時折見上げ、満足そうに鼻を鳴らした。彼は手許から顔を上げ、

ぼんやりとそれを一瞥した。彼には馬たちが、琴の音色のせいで穏やかな気持ちになっているのかどうかはわからなかった。わからないと思った。そもそも馬たちが自分の琴の音色に耳を傾けているのかどうかさえわからないと思った。しかし彼はいつものように、そのまま微笑みとともに柔らかな視線を子期に返した。子期の目はどこまでも優しげに、陽光にきらきらと毛並みを輝かせる馬たちに向けられていた。これでいいのだと彼は心に呟いた。

その日、泰山の麓の邑、泰安に宿した二人は、子期の知友の豪族宅で、彼の演奏を熱望する一族による盛大な歓迎を受けた。一夕、しんと静まり返った小さな邑に時ならぬ琴の音が莊嚴に響き渡り、耳を傾ける人々は感涙に咽び、酒を口にしない彼の前で宴は夜遅くまで続いた。翌日、泰山の山頂まで案内人を立てると執拗に言い張る主の申し出を丁寧に断り、ただ道筋を聞いただけで、二人は朝遅くのんびりと出立した。城門まで見送りの長い行列が続き、彼は歓待の人いきれに内心辟易していたので、城門を出て馬車に子期と二人だけになると、ほっと気持ちが緩んだ。

遠くから望む泰山は、赤い大地の間に忽然と薄い緑を滲ませる、標高の低いならかな山脈であったが、近づけば近づくほどさらに異なった美しさを幻のように現わし始め、やがて眼前にそそり立つその景観に彼は目を奪われた。まさしく名山の名に恥じぬ山であった。思わず子期に目をやると、子期の目も彼に向けられ、彼の胸中の感嘆を祝福するかのようによやかに微笑んでいる。二人は言葉もなく、まるで少年時代に戻ったかのように、泰山の景観を交々眺め合った。

そもそも彼が泰山に魅かれたのは、昔、師の家の書庫にあった竹簡の詩篇を目にしたからであった。師は演奏のためには教養や知識が必要だという信念のもとに、琴だけでなく、弟子たちに文字や書や学問やを教えた。そのためか、師の家にはたくさん竹簡があり、弟子たちはそれらを自由に読むことができた。彼と子期とはたくさん弟子の中でも文字を読むことを特に好み、師を喜ばせた。そして師は、彼と子期の読む竹簡の文章や詩篇の一つ一つについて詳細な注釈を加えた。彼はそのときの師の弾むような口調と表情とをこの上なく愛した。農作業や家事や琴の修練を終え、通いの弟子たちも帰って眠りに就く前、灯した暗い松明のもとでの師のくつろいだ談話やそれについての議論のひと時は、彼の人生のうちで数少ない楽しい思い出の一つであった。

泰山とは多くの岩が瘤のように積み重なり、魯の国の人々の仰ぎ見る山だという。

彼が詩篇にあった泰山なる山について質問すると、師はそのように詩句を説明し、夏、殷、そして近くは周の君主がそこで祭祀を行なったらしいと付け加えた。謂わば、泰山とは歴代の君主にとつて、天を祀り、地を祀り、その権威を天下に示す重要な儀式を執り行う神聖な山であると同時に、その山頂から朝日を仰げば、肉体は滅んでも魂は永遠の命を授かるとの民間信仰をも伝える山であると。師のその言葉は泰山という名とともに、そのときからまるで密やかな生命の烙印のように彼の胸に焼きついて離れない。それ以来、泰山の位置を憑かれたように繰り返し尋ねる彼に、師はいつも苦笑を禁じ得ないようであった。

琴を教えるばかりでなく、学問を奨励し、学問を教えるという師のそうした方針は、文字通りの慧眼であったと彼は思う。そうした教養や知識が演奏の技術に対する感受性を深めることにおいて、どれほどの影響を彼に与えたかは計り知れないと考えることがあった。技術はただ技術のみでは向上せず、そこには教養や知識による、ものの見方の深化が必要とされるようであった。

まだ少年だった頃、彼はよく思索し、繰り返し師に尋ねたものだった。自然の物音を、あるいは静寂さえをも表現した人工的な音色が、なぜ自然そのものよりも人々に感動を与えるのか。人々はどうして実際の風声よりも爪音による風声を求めるのか。むしろ求めざるを得ないのか。

師の回答は至って単純で、単純であるからこそ深淵でさえあった。それは爪音に人間が表われるからだ。そう考えるしかない。琴の音色とは、人間を通じた自然の音色なのだ。その音色の人間性にこそ人々は魅かれる。だからこそ、演奏家の持つ教養や知識がその音色の深さを決める。おまえの琴の音色は、おまえの持つ教養や知識によって深さを与えられているのだ。

いや、もしかしたらそうではなかったのかもしれない。今だからこそ彼は自らに吹き、そして密かに思い起こす。松明の炎が揺れるたびに師の影も揺れ、白髪と白い顎鬚とを長く伸ばしたその表情に様々な陰翳を作った。年輪のように顔に刻まれた深い皺の陰が、まるで師の奥深い心の綾や累積された広い教養や切磋琢磨した深い思想やを象徴しているような気がして、彼はいつも幸福な気分浸った。そして一切の世俗の楽しみを従容として断ち切り、ただ自らの琴の絶えざる修練と弟子たちの成長にのみ腐心するその姿を認める

たびに、こういう人物になりたいと心底から憧れ、いつまでもこの師のもとにいたいと子供心に願ったものであった。だからこそ彼は師の厳しい要求にも挫けることなく就いていったし、師の課した過酷な試練にも必死の思いで打ち勝ち、その結果、自らの音色を手に入れることができた。単なる教養や知識ではなく、敬愛する師と共有するそうした豊かな体験こそが、演奏への奥深い感受性を育てたのかもしれないと同時に彼は考えていた。師はその名を成連と言い、子期が一族の武術の訓練の中で指を傷め琴を捨てた後、失意のためか子期をも含めて他の弟子たちをすべて破門し、彼だけに持てるもののすべてを注ぎ込みながら、さらなる厳しい修練と試練とを与え続けた。そしてまるで自らの命さえ彼に移し込んでいったかのように、彼の着実な成長とともに徐々に衰え弱り、ゆっくりと死んだ。自分が死して後も琴にのみ生き、決して修練を怠らず、必ずや琴によつて不動の名を成せ

という言葉を残して。師の土地と家と琴と多くの竹簡とが、まだ少年の面影を残す彼のもとに残されたが、彼はそんなものは一切望まなかった。ただ師に生きていてほしいとそれだけを心から祈念した。悲泣の迸りをのどで堪えながら一人師の亡骸を棺に納めて安置し、毎夜憑かれたように棺の横に添い寝して、やがて一人涙を流しながら挽歌を詠い埋葬した。彼はその後長く喪に服したが、悲しみの癒える日が来るとは到底思えなかった。だが月日はどんなに直接的な悲しみをもゆつくりと心の深い水底に沈め、あたかも水面が温かい陽光を反射して暗い水底をゆらゆらと隠すように、鋭く酷い思い出を徐々に清らかに均していくようであった。彼は時のそうした悪戯を初めは歳月の秘める残酷さとして認知したが、やがて身も心もそれを手放して受け入れるようになった。ただ、師の今際の言葉だけがそれからもずっと彼の心に生きて棲みつき、彼はその言葉を裏切るまいと一心不乱に精進を続けたが、やがて師の影はむしろ彼自らの美意識や自尊心に外形を変え、今も失われぬ師への敬愛と一体となって彼の本心を幾重にも縛った。馬車に揺られ泰山へ向かう彼の心には、琴に長じ師を慕う以外に何の欲も持たぬ、まだ何も知らない少年だった頃のすでにして清らかな思い出が、その頃の充実感の記憶とともに時折音のないまま縦横自在に駆け巡った。

馬車が泰山の山道に差しかけた頃、俄かに険しい黒雲が西から渦巻くように低くかかってくる。雷鳴が遠くで時折鳴った。泰安に戻ろうかと彼は一頻り逡巡したが、風趣に富んだ山容に誘われ、不安を感じつつも馬車を進めた。子期はすべてを彼に任せ切ってもいいかのように、温和な微笑みを絶やさぬまま、雨の降り出した窓の景色をただ穏やかに眺めるばかりである。雨は乾いた大地に荒い音を立てて沁み込み、水の匂いを爽やかに立

ち上らせ、泰山一帯の緑を艶々と輝かせた。

馬車を走らせているうちに、折から風雨が強まった。暫時の間に雷鳴は近づき、耳を聳するばかりに轟き続ける。馬車は突風に頻りに煽られ、屋根の幌が吹き飛ばされそうに音を立てて波打ち、閉ざした窓外から馬たちの嘶きが悲しげに響いた。これ以上はとて先へは進めないという僕の言葉に、二人は馬車を降り、とある岩陰に避難した。風下の岩肌 shallow 洞窟のような広い窪みがあり、二台の馬車はともにそこに避難することができた。風雨だけは避けられたものの、嵐はますます強まるばかりで、先の旅程が危ぶまれた。計画ではもう少し先まで馬車を進め、あとは半日の徒歩で山頂に至り、一泊して朝日を仰ぐ予定だったが、強風が唸り、幽遠な風光を形作るもの静かな山の木々が、今は得体の知れぬ邪神のようにどよめいている。夜の訪れはまだ遠かったが、荒れ立つ空は不気味に暗く稲妻が頻りに走っては雷鳴があとを追いかけて、どうやらこのままここで一晩明かさねばならぬような気配であった。僕が洞窟の暗い地面に敷いた敷物の上に腰を下ろし、二人は冷たい岩肌に背を預けたが、彼はそばにいる子期のことも忘れ果て、地鳴りのように周囲から押し寄せる嵐の気配に鬱然と五感を委ねた。

まるで俺の人生と同じではないか 彼はふと思った。始終心を脅迫するつまらぬ美意識や自尊心に圍繞され、心を隠し、自由を失い、進むことも退くこともできぬこの鬱屈状態。琴によって勝ち得た名声よりも、あり得べき自由で気儘な人生への狂おしいまでの未練が、今もあやしく彼の心を侵し始めていた。いつものように心がどす黒く渦を巻き、気分が徐々に擦れ、やがては険しく波立ち始める。彼は歯を食いしばって心の波立ちに抗おうとしたが、それが虚しい抵抗だということもすでにして自明であった。

いったいいつ頃からこんなふうになったのだろうか。あの少年時代の孤高の純粹さはいつ頃から失われ、いつ頃から世俗の醜い欲望が心に棲みつくようになったのだろうか。それともこれは生まれながらにして心と肉体とに沁みついた穢れなのだろうか。昔はただそれを自覚していなかっただけのことだ。

彼にはわからなかった。これもまた、時の悪戯とでも言う他はなかった。気がつくと、まるで自身から独立した生き物でもあるかのように、震える指はひとりで弦を掻き鳴らし、その音色は強風の唸りに耐えてまず彼自身の心に反響した。彼は我知らず弦を弾き続けた。

「伯牙よ、何が悲しい」

子期の温和な声が聞こえた。ぼんやり顔を上げると、薄暗闇の底でじつと瞼を閉じてい

る子期の、この嵐の中でも少しも変わらぬ、穏やかで伶俐な横顔が見えた。

「いや。先のことを考えてな」

いつものように心を抑えつけ、さりげなさを装ってそう答えると、子期はかすかに微笑んで、

「おまえは何でも真剣に考え過ぎる」と慰めるように言った。「心配するな。嵐は明日の朝にはやむだろう。一日足止めを食っただけだと思えばよい」

子期の静かな言葉は心全体を揺さぶり落とす未練の突風を一頻り包み込むようになった。それが子期の優しさのためか、あるいは自らの内心を隠し得るといふ、我が身に巣くう密かな優越感のためかはわからなかったが、同時に再び盛り上がるうとする焦燥の中で、彼はあくびを噛み殺したくなる自分をかすかに意識した。雷鳴が耳を聳するように間近に大地を震わせ、強烈な稲光が一瞬、あたりを青白く浮かび上がらせた。と、不意に心が浮いた。稲妻が彼の意識の暗闇までも、激しい光でたちどころに照らし出したような気分であった。彼には子期の言うことが、聞く前からすでにわかっていた。その言葉も口調も、寸分違わずわかっていた。彼は愕然としていた。子期の批評がつまらないのは、実は彼が子期の胸中を、さながら自分の心のように理解できるからではないのか。

振り返ってみれば、子期が琴の音色によって彼の気持ちるびたりと言い当てるのと同様、彼にも子期の考えることがいつも手に取るようによくわかっていた。しかも子期には彼の感情の起伏しか見えないのに、彼には子期のすべてが見通せた。子期とのこれまでの交流を考えてみれば、当たり前と言える事実であったが、おそらくは内心を隠し得るといふ子期への優越感に慢心し、今の今までその事実を直視し得ないでいたのだった。

彼は思わず子期から顔をそむけ、そしてはっと弦から指を離した。未練と孤独の激しい嵐はいつの間にか血溜まりのように腹の底に赤黒く固まり、静かではあるが油のようにねっとりとした濃厚な悲しみの臭いを立ち上らせて全身に澱んだ。体がひどく重かった。疲労感に似ていた。彼にはその悲しみの理由が自分でもよくわからなかった。

まるで暗い地底から湧いて出る澄明な泉のように、一つの「昔話」が悲しみの底から湧き上がっていた。まだ二人が弟子たちの間でそれほど頭角を現わしていなかった頃、子期が心を寄せた少女があった。貧しい農民の娘であることが、だからこそ到底叶わぬ恋であることが、そしてまだ世の中のことがまるでわからぬ子供だったとはいえ、そうしたことをまったく意に介さぬことがきわめて子期らしかった。無教養な農民には珍しく、内面の清らかさがそのまま外に現われたかのように、白い肌としなやかな指先と透き通った微

笑みとを持つ美しい少女であった。無器用な子期はしかし、その少女に思いを告げることがどうしてもできない。厳しい修業の合間に遠くから見つめることを唯一の慰めとしながら、ただ悶々とした日々を送るばかりである。子期も真正正銘琴を愛していたのに、そのときばかりは修練に身が入らず、師の激しい叱責を何度も買ってうな垂れた。彼はそうした子期の心中を察し、いつかその恋の橋渡しをしてやろうと内心悪戯っぽく微笑みながら、子期が自分に心のうちを告白するのを待った。しかし子期はいつまでたっても打ち明けようとはしない。相も変わらずその少女を遠くから眺めては、深いため息を人知れず洩らし、そして相も変わらず師の叱責を買っては消沈するばかりである。もどかしくて仕方がなかったが、自分の方からそれを口にするのも、何だか子期の心に泥靴で踏み込むことのような気がする。彼は事に触れて遠回しに匂わせてみることもできなかった。そんなときの子期は赤子のように頬を赤く染め、言を左右にしてうるたえた。正しく純情な友の心に、だから彼は何も知らないような素振りをし続けなければならなかった。子期のことなら何でもわかるという実感は、実はその頃からすでに持っていたものではなかったか、と彼は回想の中で思い当たった。

結局その少女は飢饉の年に、どこか遠い地方へ売られていったが、子期は潰え去った恋の苦しみさえ彼に打ち明けることなく、その苦痛に一人寂然と耐えるだけであった。子期のそうした心は今でも彼の胸底に、まるで忘れかけた柔らかい郷愁のようにかすかに息づいている。むしろ再び帰り来ぬ、友情とも呼べる最後のほのぼのとした温かい記憶として。今ではそうした感動も久しく色褪せた。同じように子期の気持ちがわかって、今、彼が自身の心に見い出すのは、裏のない正直素直な心は読むことに苦労はいらないという単純な事実だけのようであった。勿論今の子期にも言いたくないこと、言おうとしないことがないはずはない。そして彼にはそれさえも明瞭だった。あの頃よりもずっとよく見えると思った。もはや以心伝心でも言つより他になかった。どんなに遠く離れていても、子期が何を考えているかまで見通す自信を彼は今、心に明白に自覚したが、実の所それは、彼が子期に何も求めていないためなのかもしれない。期待や欲望などという、目を曇らせる何もものもないその虚心のためにこそ、子期の内心のすべてを透視することができ。まるで路傍に転がる小石でも見やるように。

路傍の小石！ 彼は胸底に突然固まりかけたその考えに少しうるたえ、まるで子期の視線を避けようともするかのようになり、暗闇の中でゆっくりと目を閉じた。だとすれば俺は、ただ子期を馬鹿にしているだけのことではないのか。

心の外に遠く追いやられていた凄まじい風雨の叫喚が、突然、大河の滝の轟きのように大きく耳を覆った。彼はしかし心に何の動揺もなく、ぼんやりとその叫喚に耳を傾けるばかりであった。やがて彼は目を薄く開いてそっと子期を窺った。子期はいつの間にかその気配を穏やかに消し、冷たい岩肌に取りかかっていたまま、静かに頭を落とし寝入っている。外では嵐が吹き荒れているというのに、子期の周囲にだけ、何ものも入り込むことのできない静謐が、粘度はあるが重さのない透明な液体のように充溢していると感じた。薄闇の中、さらに深い翳りがその横顔を覆っていたが、そこには不安や不満やのつまらない人間感情を知らぬ、生来の純粋な安らかさが漂っているように見えた。耳を聳する風の唸りの底から、その安らかな寝息さえ規則正しく聞こえてくるような気がした。彼はそんな子期をじっと見つめ、やがてそつすることが許されないような気持ちに襲われて、ふっと目をそらした。悲しみが新たに、食事時、口中の肉を噛み切ったときの自らの血の味のように心に広がった。舐めとつても白木の箸に残ってしまう朧な血の色を眼前に見るような気がした。

眠っているときも目覚めているときも、同様に安らかさを決して失わない子期のもの静かな姿影。どんなに退屈なものであると、どんなに魅力や興味を感じまいと、それが人間の理想像であることに疑いはないと彼は思った。心の奥底で、子期の正直さ素直さが昔からの密かな至願であるのも確かな事実だったのだ。正直素直な心はすべてに構えることがない。何ものに対しても物怖じせず、激することもなく、高慢にも卑屈にもならず、常にあるがままの自己を保って静やかに振る舞う。人を疑うことを知らず、騙し騙されるといふ事実も実感としては知らず、誰でも自分と同様、正直素直であると前提しているからだ。それは人の心を決して解釈しない。

それこそが人間の真のあり方ではないのか　彼は確かにその通りだと思う。子期は勿論そんな自分に無自覚であろうが、それは人間にとって最も大切なもの、見えぬものへの勇気を備えているからだ。見えぬものに取り囲まれた極北の孤独を直視し、しかもなお自身を見失わぬ精神。それこそが人間にとって最も大切なもの、すなわち勇気と呼ばれるものではないのか。

だが彼は人から騙されることに耐えられなかった。現実に他人からこつぴどく騙された経験があったわけではないが、そうした場面を想像するだけで、心は否応なく屈辱に竦んだ。騙すことによって人を傷つけようなどとは決して思わなかったが、騙されるよりは騙す道を選ぶだろうと思った。そして、自分が名声を渴望するのも、内心の屈折を隠して君

子を気取っているのも、また子期のように正直素直な人間だけを友人として認めているのも、いやそれ以前に師の存在に呪縛され、自信を持って本心に生きることができないのも、実はそんな心の弱さに理由があるのではないかと思に至るのだった。自分は自分だと静かに認めてしまえばそれで済むはずであったが、彼はそうした思いとは裏腹に、自身にまわる執拗な弱さと、それゆえの心の屈折から逃れる術を知らなかった。彼は嵐の咆哮に一人鬱然と耳を傾け、闇の中で目だけを赤く光らせながら、自身の心に荒れ狂う邪風の唸りを悲しく意識して、まんじりともせずその夜を過ごした。

翌朝、子期の目覚める前に一人静かに洞窟を出た彼は、嘘のように晴れ渡った蒼穹を見上げた。一睡もせぬ疲れた両眼にも、それは呆然とするほど眩しく美しかった。自然は人為の小事などものともせず、傲慢にも卑屈にもならず、ただあるがままにその美しさを誇っていた。背後に子期の近づく気配がした。と同時に、幾筋もの煌きがまるで大地の後光のように地平線から迸った。朝日はごつごつとした険しい起伏を持つ山際から黄金色に輝き初め、その眩い光は隣に立つ子期の顔を鮮やかに満たした。子期はきらきらと輝く瞳を細めて彼を見た。悲しみの余韻は自身の心と表情とに未だ深く刻みつけられていることを彼は自覚していたが、子期はそれをしも一夜の嵐をくぐり抜けたための曇れだと晴れやかに微笑んだ。二人は僕の用意した食事をとり、馬車を少しだけ進め、それから予定通り徒歩で山頂を目指した。

二人は泰安で教わったとおりに、巨岩を上へ上へと無限に積み重ねたような二つの尾根に挟まれた、細く急な、道とも言えぬ谷間の坂道を登っていった。それが山頂への一番の近道だという話であったが、仰ぎ見れば確かに、白雲のたなびく青空を背景に、道は頂上まで一直線に通じているかに見える。だがそのため、前方の道は眼界を圧するように険しくそそり立ち、その勾配は尋常ではなかった。息を整えるために途中に立ち止まって下を眺めると、恐ろしいほどの急勾配が麓まで続いている。おまけに足もとは大小の石くれがごろごろと転がり、油断して足を滑らせれば、下までの長大な距離を簡単に転がり落ちそうであった。命の危険さえ感じてしまう予想以上の難所に、彼は天を仰いで密かにため息を洩らした。が、ここまで来て引き返すわけにもいかなかった。また焦ってみても仕方がなかった。いやむしろ、焦りは禁物であった。二人は言葉もなく協力し合いながら、注意深く一步一步足を進めた。ともかく足を進めていさえすれば、やがては目的地に辿り着く。そうした態度は、師のもとで叩き込まれた琴の修練に何となく似ていた。徹夜の疲労は並大抵のものではなかったが、危つくざらついた足許を踏み締めるように無言で登っていく

うちに、やがてその単調な動作の繰り返しに充実感のようなものを覚え始め、彼は胸中に何かしらつきつきと華やぐような心の躍動さえ感じ始めていた。

途中所々の松の見事な枝振りの下で小休憩を挟み、僕の一人が運ぶ水を飲んだ。進めば進むほど急になる小道を登り、半日の行程にくたくたに疲れ果てながら、二人はそれでもやがて山頂に辿り着いた。汗にまみれた衣服を時ならぬ冷風がゆったりと通り抜け、麓に較べ、気温が随分と下がっていることを思い知らされた。一昨夜の宴席、泰安の邑長の話によると、泰山の最も高い頂を天柱峰と言い、東南の絶壁に、虚空に突き出た巨石があるという。勾配の緩やかになった山頂の広場を巡り、二人はやがてその巨石を見つけた。どういう自然の悪戯か、なるほど東南の断崖に石が斜めに突き出ている。そこから日の出を拝めば、永遠の命を授かるとは邑長の言であったが、下を見れば足が竦み、足を踏み外せば勿論命はなく、やめた方がよろしいでしょうと邑長は笑った。子期はさすがにその石に近づくことさえしなかったが、彼は制止を振り切って石を踏んだ。邑長の言葉に反撥めいたものを感じていたわけではなく、何かしら甚大な恐怖を自分に強制したいような気分からであった。わざと下を直視した。断崖が下方まで切り立ち、その途端に足も心も血の気が引くように竦み上がり、形振り構わず四つん這いになって岩の表面にしがみついた。それでも断崖の彼方へ引きずり込まれそうな強烈な恐怖が全身を冷たく吹き抜け、まるで瘴に罹ったように頻りに目と肢体とが揺れた。緩やかな風さえも、羽毛のように簡単に体を持っていくそうに感じ、自分の身が途中の岩に何度も撥ね当たり、もんどりうちながら断崖の底に吸い込まれていく様子はつきりと眼前に浮かんた。落ち着け落ち着けと自分に繰り返し言い聞かせ、深呼吸を一つしてから、彼は岩の上を徐々に這い始めた。自分の動作をまるで死に際の蛙のようだとの片隅で苦笑したが、そんなことに頓着してはいられなかった。震えながら少しずつ、やがて先端まで進んだ。すべすべした石の表面に指を立て、指先に渾身の力を込め、しがみつくようにして顔だけを上げて周囲を見渡した。邑長の語った、頂上から眺める雲海の美しさが脳裏を掠めたが、眼下に雲はなく、麓までの景観をはつきりと望むことができた。残念だなと彼は一瞬思った。周囲の遠い山々が庭石の薄い影のように小さく眺められた。遠くの川が白く光っていた。冷たい風が頬を逆撫で、彼はいつの間にか巨石と一体となったような自分を感じていた。自身の体をも含めて、この世界の一切が静止したように思われた。先ほどまでの凄まじい恐怖はいつしか忘れ去られ、まるで眩暈のように爽快な気分が緩やかに全身を満たしていた。彼は冷たい岩肌に頬をつけ、目を閉じてその気分浸った。そのまま耳を岩肌に押しつけると、くぐもったような

分厚い騒音が岩を通して小さく耳に入り、彼はまるで世界の奥底から発せられる音を聞くような気がした。このまま世界が停止してくれればいいのに、と目を閉じたまま安らかに考えた。少し油断すれば、まどろんでしまいそんな緩やかな気分であった。やがて彼の名を呼ぶ、子期の不安げな声がかすかに聞こえた。頭を上げ、右手をちょっとだけ振って、また徐々に石の上を退き始めたが、彼の心にすでに恐怖はほとんどなく、目は遠くに霞む山々に憧れのように向けられた。彼の足が再び土を踏んだとき、石から距離をとって見ていた子期はようやく大きなため息を洩らして歩み寄り、彼に向かって悪ふざけが過ぎると安堵したように微笑んだ。くだらない行為だと思わないわけではなかったが、悪ふざけのつもりはなかった。今はただ、そうした凄まじい恐怖に打ち勝つことだけが、自分の精神を一段高いところへ持ち上げてくれるような気がしていたのだった。

俺はこういう新鮮な感動だけを求めているのかもしれない、と彼は地面に腰を下ろし、僕の差し出す水の器を手にしたままふと思った。自身を一瞬のうちに打ち倒すような新鮮さだけを探し求めて。もしかしたらそれこそが俺の半生だったのではないか。彼はぼんやりと周囲を見回した。子期の顔も僕の姿も彼の目には入っていないかった。ただ先ほどの爽快感だけが、何かの名残のように心の表面を涼やかにたゆたっていた。

山頂で僕の運んだ食事をとり、帰途についた。足を滑らせる危険は上りよりもずっと大きかったが、それでも下りは段違いに楽であり、彼は子期と雑談を交わす余裕さえ生まれ、上りの半分以下の時間で麓まで辿り着いた。疲労感ほとんどなく、身も心も信じられないほどに軽かった。子期は穏やかな笑顔で終始彼に対し、昨夜からの彼の心の屈折を疑うことはなかった。彼にはそんな子期のすべてがわかっていて、わかっている自分を今でははっきりと自覚していた。心にたゆたう爽快感の名残のためもあるが、それは自らの心に潜む邪曲をも明瞭に浮き彫りにさせていたが、彼はそれをほとんど気にしなかった。帰路の十日間、鐘一族の知友宅に厄介になっても、彼は疲労を理由に、所望される琴の演奏をことごとく固辞し、宴会にも顔を出そうとはしなかった。子期はそんな彼をひどく心配し、すべてを彼の望むままに取り仕切ってくれたが、一人気ままに過ごす彼の心は周囲の心配に相違して広く晴れていた。今は心に何の屈託もなく、ただその気分一人浸っていたと思うだけであった。これでいいのだと彼は何度も心に呟いた。

泰山から帰ってまもなく、彼は子期が軽い病気で寝込んでいるという便りを聞いた。旅の疲れでも出たのだろうか、もとより心配などしないでいたが、それからしばらくして、突然、鐘家の僕が息せき切って馬で駆けつけ、子期が危篤だという知らせをもたらした。

急ぎ立てられるままにそれでも即座に馬車を仕立て、半信半疑の思いを抱きながら数里の行程を急ぐと、領地のはずれまで出迎えた別の僕が、子期がすでに帰らぬ人となったことを伝えた。慮外の出来事に何となく首を傾げたい気分もあったが、近づく鐘一族の城の周囲には領地や近辺の多くの人々が佇み、空を見上げて大声で泣き、あるいは泣き濡れた顔を震える両の手で覆い、身分を問わず、生前の子期の徳行を偲び、その死を悼んでいた。

子期のまだ若い妻も、未だ健在である父母も、救いを求めるかのようにおろおろと両手を広げて彼を迎えた。そして実感のないまま悔やみの言葉を述べる彼に、まるで縋りつくようにまとわりながら、彼を子期の広い居室に案内した。頑健な武人でもある父親にしてそうであった。そうした様子は深い悲しみ以外の何ものをも表現していなかったが、部屋に一步入り、広い寝台に硬直する子期を目にした途端、彼は家人のそんな悲しみを忘れた。彼はしばらくの間二人だけにしてくれと家人に頼み、横たわる子期の生白い死に顔を薄い目でまじまじと見つめた。呆気ない死に様であった。思わず指を伸ばして子期の頬に触れようとしたが、どうしても触れることができなかった。妙な気分だった。未だ子期の死に実感は持てなくても、予想もできぬ突然の死が信じられないという気持ちではなかった。子期は確かに死んで、今そこにいた。自分の気持ちがよくわからなかった。彼は部屋を出ると家人への挨拶もそこそこに鐘家の城を辞し、変に浮遊する心を片隅で意識しながら、気がつくとゆらゆら家に帰り着いていた。

その夜、まだ子期の死が納まり切らない奇妙な気持ちのまま、彼は窓を斜めに横切っていく黄色い月をじっと眺めた。月は窓から見える周囲の大地を幻想的な暖色に浮き上がらせ、まるで夢の世界が現前しているかのような錯覚を彼にもたらした。寝台にじつとうすくまる彼に、信じられないほどに煌々と輝く美しい月であった。子期の死が悲しいという気持ちなど今でもさらさらなく、ただ安らかに眠り込んだような臨終の子期の変に生白い横顔が、温かさすら感じさせるほどに強烈な光を放つ月に重なって眼前に浮かぶばかりである。あいつは未練など何もなく、死への恐怖さえ腹のうちに括り込んで、平然とこの世を去ったに違いない、と彼は一人心に呟いた。それは一つの正しい精神がこの世から消えたということだ、と彼は一人心に呟いた。だが少なくとも俺にとっては、その正しさは何ものをも意味しない。ちょうど、あの美しい月に憧れることはあっても、それを自らのものにしようなどとは思わないように。眺める月は限りなく美しいが、最初から欲望の対象などにはならないのだった。

正しさと好みとはまったく別のものだ

彼は不意に心に浮かんだその言葉にかすかな

衝撃を覚えたが、しかし同時に、それもずっと以前からわかっていたことのような気もしていた。

子期の棺が殯の宮に移されてから二十日ほどが過ぎた。彼はさる豪族の屋敷に招かれ、そこで琴を弾いた。弦を弾く彼の心にすでに子期はなく、彼は伸びやかに躍る自らの指だけを軽快に意識していた。演奏が終わると、その場にいた人々はみな彼の琴の腕を散々に褒めそやした。彼は内心の満足に注意深く柔らかな微笑みを浮かべたが、なぜかふと気になって、今の曲に込められた私の思いがおわかりだろうかと尋ねてみた。演奏された曲はすでに自らの指を離れたものであつて、他人がそれをどう解釈しようが関心はなく、そんな気持ちはこれまでにないことだつた。すると今までの饒舌がまるで嘘のように、ここにぼつぽつと落とされる言葉はみな当ての外れたものばかりであつた。一方ではどうでもよいことと思いつつ、しかし彼は何となく嫌な気がした。そんな気分は生まれて初めての経験であつた。帰り道、豪華な謝礼の品々とともに一人馬車に揺られながら、不意にそれが寂しさであると気がついた。

彼は家に帰り着くと、そのまま一人で周辺を歩き回つた。足取りはただの散歩のようにゆつたりとしたものだったが、心の中は、さながら泰山の嵐の咆哮が舞い戻ってきたかのように激しく揺れ動き、どす黒く渦巻き乱れていた。彼は自分の土地を越え、どこまでもどこまでも歩いていきたいと思つた。揺れる自分の心がまるでわからなかつた。ただ寂しがつた。彼は玉蜀黍畑の間に縦横に続く畦道にしゃがみ込み、初めて見たものに恐る恐る興味を示す子供のように、足下の乾いた土を注意深く一握りつかみ、どんな味がするものかと試しに口に入れてみた。土は舌の上でただざらざらと、不快に土の味がするだけで、彼は込み上げる猛烈な吐き気に、口中の土を四つん這いになって吐き出した。農作業をしていた僕が一人、顔色を変え、慌てて駆け寄ってきた。子期の死への悲しみに、彼が本当に乱心したと思つたらしかつた。彼はゆつくりと立ち上がり、心配顔で彼の目を覗き込む僕に涙目で笑いかけ、「土はただの土だ」と呟いたが、その声は低く口中にこもり、僕の耳に届いた様子はなかつた。怪訝な表情を浮かべる僕に、「いや、何でもない」と言い直すと、何事もなかつたかのようにふと心が平靜に戻つていた。寂しさは心の片隅に固着して、そこがかすかな疼きを発しているようであつた。

しかし日がたつにつれて、心の片隅に棲みついたその寂しさは、滴る水がやがて大杯を満たすように、次第に重くゆつたりと膨れ上がってくるかようであつた。心を引き裂く一瞬の衝動のように鋭利なものではなく、捉えどころもなくぶわぶわと揺れ蠢くこの寂し

さ。自分が理解を欲しているとは！ 彼は内心啞然としていた。不思議である以前に、まるで笑止であった。しかもその寂しさは決して子期の死への悲しみ故でなく、彼は我が身の寂しさしか念頭にない自分をはつきりと知っていた。子期はすでに殯の宮でほとんど朽ち果て、その腐臭さえも弱まり、心も体も着実に真の死に近づいていた。やがて挽歌が詠われ、子期はその死を納得し、地中深くに埋葬される。それとともに自分の心の中でも、子期の骸が静かに記憶の底に埋葬され、その記憶さえもが忘却の彼方へ風化しゆくことを彼はすでに知っていた。

毎日、一人琴を爪弾く指先に力は入らず、指は無意味に弦を掻き鳴らすだけであったが、あるうことかその音色さえ、何の教養も持たぬ僕たちの涙をすら誘うのだった。そしてその嘆声さえも、今の彼にはむなししいものに聞こえた。重い虚空のように心に澱んだ寂しさは、時折予期もなしに激しく泡立った。

夜が来て寝台に横たわれれば、心は否応なく我が身に及ぶ。暗闇の中に一人目を見開く自身の身を、すでに抜け殻のようなものと彼は感じた。子期と子期の批評に退屈さしか感じなかったのは、彼が子期の本心を他愛もなく理解できたこと以上に、実は彼の精神と子期の精神とがびたりと同じ幅を持ち、常に相呼応していたためではないのか。まるで双子の兄弟のように、寸分の隙もなく重なり合った心。もしかしたら本当は、子期は彼のすべてを見通していたのかもしれない。そして彼はただそんな子期に甘え、寄りかかっていただけなのかもしれない。理解し合えることが退屈であるのに、理解し合えないことも辛いとは、何と贅沢な、そして何と甘えた心であることが。

彼はそんな自分を許せないと静かに断じたが、それこそが人間なのだという気もすでにどこかでしていた。そして自らに罰を課さねばならぬという、その刹那に湧いた重い一念も、もはや従容として自らに為し得るごく自然な行ないのようにも感じられるのだった。あれほど心を支配してきた世俗の楽しみごとにさえ、今はほとんど何の魅力も覚え、これからはもう孤独感が内心を脅迫することもないように思われた。人生とは死ぬまでの暇つぶしに過ぎぬ。そして俺はその暇つぶしにさえすでに興味を失ったようだ。どうであれ、人間とはかくも退屈な代ものなのだ、彼は自室の寝台に横たわり、闇に揺れる屋根裏を見上げたまま一人頻りに自らに呟いていた。

それから数日後、彼は長年愛用してきた自らの琴の弦を絶ち、死ぬまで再び琴に触れることがなかった。彼は何も語らず何の色も見せず、あたかも閑寂を楽しむかのように、日々暁とともに目覚め、黄昏とともに眠った。昼間は僕とともに寡黙に農作業に従事し、雨の

日は詩作と書に耽り、空気の澄んだ朝夕は付近の山野を一人何をするでもなく漫歩した。その顔に不幸の翳が兆すことは決してなかったが、ただ、何をしているときでも、さながら自身の内奥に沈み込むかのように、不意に手を休めて臉を閉ざし、一頻り静かに顔を俯けることがあった。そんなときの彼はむしろ自然と一体となり、大地を渡る風の声、木々のざわめき、小川のせせらぎ、朝な夕なに響く鳥たちの囀り、それら人間の手を通さぬ自然の呼吸音の微妙な味わいにじつと耳を傾けているようにも見えた。領主や豪族からどれほど懇望されても琴を弾くことだけは頑なに固辞し、やがては見知った豪族たちとのさやかな付き合いさえも徐々に断ち切って、それだけは相も変わらぬ超然とした無表情をただ淡々と終生に渡って持した。何の波風も立たぬ、ただ青く澄み切った大海のように深く静かな晩年であった。風聞を耳にした人々は、自分の音色を聞かせるに足る唯一の友人が死んだためだと噂し、多くの賢人たちがその知音の風説を後世に長く伝えた。

列子曰、伯牙善鼓琴、鐘子期善聽。伯牙鼓琴、志在高山、子期曰、善哉我峩乎若泰山。志在流水、子期曰、善哉洋洋兮若江河。伯牙所念、子期必得之。呂氏春秋曰、鐘子期死。伯牙破琴絕絃、終身不復鼓琴。以爲無足爲鼓者。『蒙求』

#### 参考文献

『新釈漢文大系』 『詩経』 『荀子』 『淮南子』 『列子』 『蒙求』  
『大漢和辞典』